人権・同和教育だより　　令和５年６月１６日

そよ風

第３号　　今治市立立花中学校

ONE TEAM

昨年のサッカーW杯、３月のＷＢＣ（野球）など、それぞれの場所で活躍する選手たちがチームジャパンとして集まり、『ＯＮＥ　ＴＥＡＭ』としてプレーする姿に、日本中が盛り上がり、大変元気づけられました。ＷＢＣでは、ラーズ・ヌートバー選手も大活躍でしたが、野球の日本代表「侍ジャパン」では日系選手が代表に選ばれるのは初めてのことだったそうです。侍ジャパンの栗山英樹監督は、就任した当初から「グローバル化する世の中で、そういう人たちが仲間として『普通にいる』ということを、子どもたちに伝える責任がある。生まれた国は違っても、育った環境が違っても、同じチーム。仲間として受け入れる。それが当たり前にならないとおかしい。」と話していました。その言葉の通り、アメリカ育ちで面識もほとんどなく、日本語をあまり話せないヌートバー選手に対して、

・　選手たちがヌートバー選手のミドルネーム「達治」にちなみ、「たっちゃん」と印字されたＴシャツを着て歓迎した。
・　大会では、ヌートバー選手の「ペッパーミル・パフォーマンス」を大谷翔平選手らがそろって真似をした。
・　日本選手から積極的に英語で話しかけられたヌートバー選手は、日本語を覚えようと努力した。
・　ダルビッシュ有選手はチームワークを深めるために、多くの選手たちに呼び掛け、食事を共にしながら毎日いろいろな話をした。

など、プレー以外にも数々の素敵なエピソードがあります。お互いを思いやり、理解を深めようとする姿は、チームのよい雰囲気づくり、そしてＷＢＣの日本の優勝につながったことは間違いありません。勝利を目指して戦う姿を見せるだけではなく、栗山監督が目指した「当たり前のことをスポーツの力で示す」ということをしっかりと伝えたように思います。

さて、上記に書いた『ＯＮＥ　ＴＥＡＭ』。２０１９年に日本で開催されたラグビーW杯のときによく聴いた言葉です。国や地域別の代表チームを編成するとき、多くの競技は国籍主義を採りますが、ラグビーでは国籍の違う選手たちが、桜のジャージー（日本代表のユニフォーム）を着るのが当たり前になっています。ラグビー発祥国であるイギリスは１９世紀頃、世界中に広大な植民地を持っていました。移住先でもみんなでラグビーを楽しめるようにという考えのもと、代表資格に国籍を重視しなかったそうです。国籍主義ではないラグビーの代表は、「多様性」を象徴していますね。

先日行われた、今治・越智中学校総合体育大会では「チーム tachibana」の素晴らしい頑張りが見られました。選手のプレーも応援の様子も、立花中が『ＯＮＥ ＴＥＡＭ』として、「当たり前のことをスポーツの力で示す」ことができたのではないでしょうか。